

巻頭言

本誌は2012年に創刊された「恵寿総合病院医学雑誌」の第11巻にあたります。本巻には総説3編、原著1編、症例報告3編の合計7編と当院で開催された過去1年間のTQM（Total Quality Management）大会での優秀賞6記録が掲載されています。

総説の一つは筆者自身が著者である“当院における新型コロナウイルス感染症対応クロノロジー”です。これまでの当院の対応や頑張りなどを時系列に記載した総説です。他の総説は昨年当院で心療内科が新設され、その科長が執筆した“臨床医学におけるデモラリゼーションの重要性—その概念と治療的関わり（対応・対処法）を中心に—”と当院産婦人科医師が執筆した“子宮収縮抑制と切迫早産治療”である。総説以外として、急性単純性膀胱炎におけるESBL産生菌の分離頻度の年次変化、視床下部性と推測される出産後下垂体前葉機能低下症の1症例、血管免疫芽球形T細胞性リンパ腫の単剤抗腫瘍薬 purine nucleoside phosphorylase 阻害薬によりEBウイルス関連B細胞性リンパ腫（DLBCL）を合併した1例、同種免疫性胎児肝障害が疑われた胎児死亡の1例の論文が掲載されています。当院TQM大会優秀賞には終末期、オンライン診療関係、待ち時間短縮の取り組みなどの発表記録が掲載されています。

通常業務に加え、新型コロナウイルス対応業務を行いながらの執筆や発表作業には多大な労力があつたと思います。当事者には後々、頑張った苦勞が必ず報われるはずです。

本巻頭言執筆は2023年（令和5年）3月9日です。国内新型コロナウイルス感染初発例から3年経過し、昨年12月に猛威を振るった新型コロナウイルス感染症第8波は2月に入って減少し、第8波は収束したと思われまふ。国は2023年5月8日に感染症法上の位置づけを5類に変更する予定とし、これに伴い外来や入院での医療提供体制も段階的に変更するとしています。一方でこの数年、少なかったインフルエンザが流行しており、新型コロナウイルス自体が変化したわけではないので、医療機関としては感染症対策を疎かにするわけにはいきません。とはいうもののこれからはウィズコロナの時代として、なんでも制限ではなく、場面に応じて、うまく付き合っていくことになるでしょう。プライベートでの行動など、我慢を強いられた医療従事者にも名実ともに暖かい春が訪れることを願っています。そして、ゆとりを感じながら、本来の仕事や論文執筆等の学習や研究に多くの力を注ぎ、働きがいやエンゲージメントを存分に感じられる医療機関を目指したいと思います。

最後に第11巻の発刊を祝するとともに、第11巻発刊に際し、大変なご苦勞をされた新井隆成編集長と大成道広、長浦智里及び森下毅編集補佐に御礼申し上げます。

2023年3月吉日

社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院
病院長 鎌田 徹